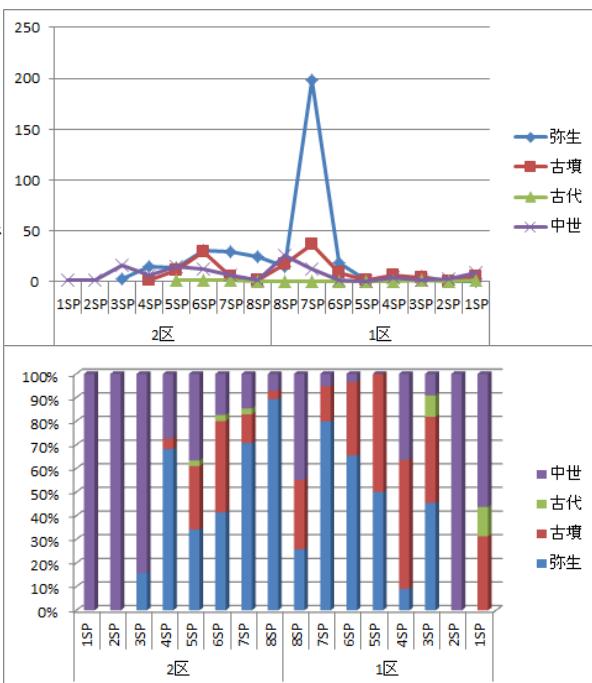


## 第4章 総括

今回の調査では、遺構の存在は顕著ではないものの、弥生中期土器をはじめ多くの遺物が出土した。また、各調査区、各SP(スパン)で自然堆積層の科学分析を行うことで、地形の変化を明らかにすることができた。以下では、この地形の変化と遺物の出土状況の関係を探ってみたい。さらに朝鮮半島系土器や塩町式系といった他地域の土器の流入について考察し総括したい。

### 第1節 遺物の出土地点と砂州の発達過程

調査スパン毎の遺物包含層の遺物の出土状況を、グラフに表した（第32図 \*掲載・非掲載のものを含めた数量）。このグラフから、弥生時代の遺物が調査区中央部で多く（最多は1区7SP）、両端で少ない傾向にある事が分かる。古墳時代の遺物は調査区中央部の1区8SPと2区5SPでピークを成し、特に2区西部で少ない傾向にある。古代の遺物は他時期に比べ特に少ない。中世の遺物は古墳時代の遺物と同様な傾向を示すが、2区西部でも検出される。これらの事柄を前述の砂丘の発達過程、及び山陰地域での海岸砂丘の発達時期（豊島、1975）と重ねると、以下の事柄が明らかになる。



第32図 調査スパン毎の遺物の出土状況

上：実数 下：累積百分率  
両グラフとも調査スパンを西（左）から東（右）に配列

1. 弥生時代から古墳時代にかけては海水準が低く、宍道湖の水位も低かったと考えられる。このため砂州上面は乾燥し、人間活動が活発であった。
2. 古代には海水準が上昇し（平安海進）、宍道湖の水位も上昇したと考えられる。出土遺物も古代のものが極めて少量で、砂州の広範囲が沈水し、生活に適さなくなっていた。
3. 中世では古代に比べ海水準が低下し、宍道湖の水位も低下したと考えられる。水位低下に伴い第3図の砂州3相当の部分が広がり、新たにできた陸域に生活の場が広がった。

### 第2節 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器

今回調査した森屋敷遺跡では、山陰地方の弥生中期土器に伴って、同時期の広島県北部を起源とする沈線文間に刻目を施す塩町式系の土器（33-1）が出土した。また、時代が異なるものの原三国後半期もしくは三国時代初頭（弥生後期～古墳前期初頭頃）の朝鮮半島系の壺（33-2）、百濟の6世紀末～7世紀初頭の朝鮮半島系高台付の碗（33-3）も出土している。

出雲地方において、遺跡内で山陰地方の土器とともに塩町式系土器、朝鮮半島系土器が出土した遺跡に限り示すと第34図のような分布を表わす。

<sup>2)</sup> ②山持遺跡(出雲市)は斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する縄文～近世の集落遺跡である。35-1は甕の頸部から胴部にかけて沈線文間に刻目を施す塩町式系土器である。35-2、3は朝鮮半島系土器で、35-2は弥生中期後葉～後期中葉の樂浪土器である。35-3は両耳付短頸壺で弥生後期でも草田5期併行とされている。森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。山持遺跡では、このほか北部九州系、西部瀬戸内沿岸部系<sup>3)</sup>、吉備系といったさまざまな地域からの土器が多く出土している。

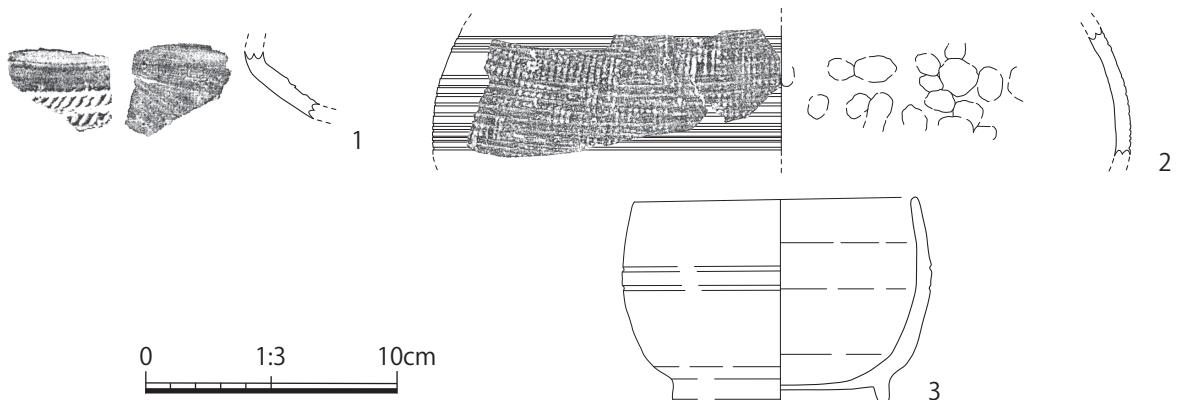
<sup>4)</sup> ③青木遺跡(出雲市)も斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する弥生～鎌倉時代の墳墓、官衙関連、祭祀遺跡である。35-4は塩町式系の甕である。35-5は陶質の朝鮮系土器で壺の一部と推定されている。このほか九州から瀬戸内地方にかけての搬入土器も出土している。これらの土器は包含層からの出土であり、周辺の集落から廃棄されたものと推定されている。

<sup>5)</sup> ④古志本郷遺跡(出雲市)は神戸川左岸の自然堤防上及び後背湿地に位置する弥生～近世の集落遺跡である。35-6は塩町式系の甕である。35-7、8は朝鮮半島系土器の両耳付短頸壺で、森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。また、北部九州系、畿内系の土器、さらに朝鮮半島由来の韓式三稜鏃も出土している。

<sup>6)</sup> このほか出雲平野では⑦白枝荒神遺跡や⑧下古志遺跡などで、朝鮮半島系土器は見られないものの塩町式系あるいは北部九州系や西瀬戸内沿岸部系の搬入土器が出土している。<sup>7)</sup>

<sup>8)</sup> ⑤タテチョウ遺跡(松江市)は松江市北東方向から大橋川に流れる朝酌川沿いにある弥生時代を中心とする縄文～中世の集落遺跡である。35-9は報告書では明記されていないものの沈線文間に刻目を持つ塩町式系の高坏の坏部分と考えられる。35-10は朝鮮半島系土器で、森屋敷遺跡33-2と同様の壺と思われる。上記の出雲市内の遺跡ほどの出土量ではないが、畿内系の土器の存在も報告されている。また、報告書で言及はされていないが、35-11は西部瀬戸内系の壺と思われる。

<sup>9)</sup> ⑥田和山遺跡(松江市)は宍道湖東岸の乃木段丘の一角を占める独立丘陵上に存在する弥生～平安時代にかけての集落遺跡である。35-12は報告書で明記されていないが、塩町式系の高坏と考えられ



第33図 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器



第34図 塩町式系土器と朝鮮半島系土器出土遺跡の分布図 (S=1/50,000)

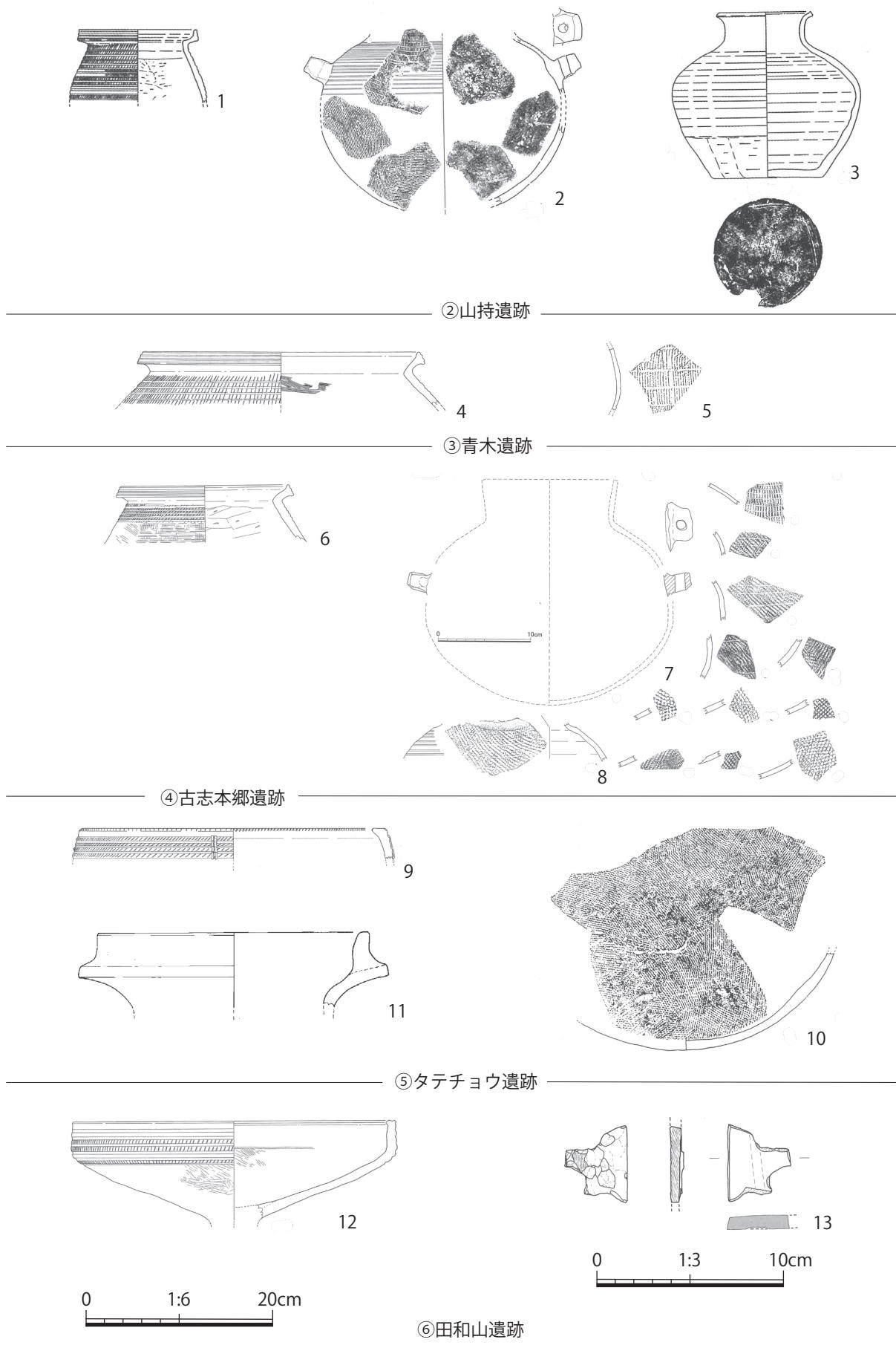
る。田和山遺跡では朝鮮半島系土器は出土していないものの、環濠内から出土した板状石製品35-13が漁浪の硯であることがわかっている。<sup>10)</sup>このように田和山遺跡でも少量ながら、他地域の土器が出土している。

このほか松江市内では、塩町式系土器は出土しないもの他地域との交流が覗える遺跡は、日本海沿岸に近い松江市鹿島町の⑨南講武草田遺跡、<sup>11)</sup>⑩堀部第3遺跡<sup>12)</sup>ぐらいであろうか。しかし、これらの遺跡については、地理的に宍道湖を介してではなく、日本海沿岸部から流入した可能性が高い。

このように見ていくと、現在確認できるところでは、日本海側から搬入されたと考えられる朝鮮半島系土器が出土する遺跡の南限は④古志本郷遺跡で、広島県北部からもたらされたと考えられる塩町式系土器が出土する遺跡の北限は⑤タテチョウ遺跡である。このことから、塩町式系土器と朝鮮半島系土器の両方を有する①から⑥の遺跡は、日本海側からと中国山地側からの文化が合流する交通の要衝として発達した遺跡と言えるのではないだろうか。ゆえに、これらの遺跡が弥生時代、遺跡によつては縄文時代から中世あるいは近世に至るまで継続して利用してきた事実は十分理解できる。

### 第3節 まとめ

今回調査をした森屋敷遺跡では、遺構の検出が困難であったが、弥生中期から近世にかけての遺物が出土し、そのなかでも弥生中期、中世の遺物が多く出土した。今回は明らかな中世の遺構は検出できていないものの、平成26年度に実施した宍道複合施設建設に伴う森屋敷遺跡の調査では、中世の遺物とともに屋敷の一部と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、<sup>13)</sup>今回の調査地で多くの中世遺物が出土したことから、屋敷の存在を追認するデータが得られた。また、これまで森屋敷遺跡周辺で、弥生中期土器がこれほど多量に出土したのは、今回の森屋敷遺跡が初めてのことである。弥生中期土器には広島県北部から流入してきた塩町式系土器も含まれ、これより時期が下るもの朝鮮半島系土器が2点出土したことも弥生時代から古墳時代にかけて他地域との交流が伺える大きな成果を得た。



第35図 そのほかの遺跡出土の塩町系土器と朝鮮半島系土器（一部別のものも含む）